

## 社会心理学

### ◇教員◇

教 授 村本由紀子、大坪庸介、石井敬子

准教授 稲増一憲

助 教 鈴木啓太

### ◇学生◇

学部 47名 修士課程 5名 博士課程 8名

社会心理学は、社会的な環境の中における人々の行動と、その背後にある心的過程および社会・文化構造との関わりについて研究する実証科学である。研究対象は、社会的状況の理解過程やそれを支える情報処理過程、対人行動、集団の一員としての行動、組織における人間行動、文化的歴史的な影響過程など幅広い。社会心理学研究室の学部教育においては、さまざまなテーマに及ぶ社会心理学の基礎的知見や理論を学ぶための概論、特定のテーマに関して深く掘り下げた議論を行う講義、実証的な研究手法を学ぶための実験実習や社会調査法実習、統計学の授業が開講されている。また、隣接科学としての心理学、社会学はもとより、政治学、経済学、哲学、言語学、文化人類学、生物学、脳科学、情報科学、精神医学などの幅広い知識が役に立つことが多く、これらの授業への参加を積極的に勧めている。

研究方法論の習得プロセスは妥協を排した厳しく長い訓練を伴うが、それは学生どうし、また学生と教員との和気あいあいとしたジョイント・プロジェクトでもある。関心を同じくする仲間と知的刺激に満ちたディスカッションを重ね、心と社会に関わるさまざまな問題にアプローチすることの楽しさを、ぜひ体感してほしい。

各教員の研究領域および担当授業の概要は以下のとおりである。

### 村本 由紀子 教授

主として集団心理学・文化心理学の領域を専門とし、マイクロな個人の心とマクロな社会環境とのダイナミックな相互構成関係を解き明かすことを目指している。特に、集団規範や文化の生成・維持のプロセスを探究することに関心をもち、実験室内にミニマルな行動の連鎖を作り出すことを目指した心理学実験と、社会の現場における慣習や思考様式の変化を継時的に追跡するフィールドワークという方法論を両輪として、一連の研究に従事している。現在取り組んでいる主な研究テーマは以下のとおり：①多元的無知による集団規範の維持過程、②共有信念の文化差の

規定因、③文化的慣習の社会生態学的基盤、④組織文化・風土をめぐる諸問題、など。

例年の主な担当科目は、「社会心理学概論Ⅰ」（概ね隔年担当）、「社会心理学実習Ⅲ」および「社会心理学演習」である。概論では、組織・集団・文化に関わる種々の社会現象を題材として取り上げ、社会心理学や関連領域の知見を用いてそれらの現象を多面的に読み解く。実習では、研究室において現在進行形の研究プロジェクトに受講生も加わり、研究計画の立案からデータ収集と分析、考察に至るまでの一連の研究プロセスを体得していく。演習では、心の文化差、文化的慣習や集団規範の生成・維持過程等に関する社会心理学の基本研究を概観したうえで、先行研究の限界を超えた新たな研究枠組みや方法論を多面的に検討し、理解を深める。ただし2026年度については、管理職業務に専念する必要上、4年次向けの社会心理学演習（卒業論文指導）のみを担当する。

### 大坪 庸介 教授

人々の社会行動・社会的認知の適応的基盤と適応的エージェント同士の相互作用が生み出すマクロなパターンに関する研究に取り組んでいる。例えば、進化ゲーム理論では、自己呈示とその知覚のような2つの現象はシグナリング・ゲームのシグナル送信者の行動と受信者の認知として統合的に分析することができる。つまり、どのような自己呈示とそれをどのように知覚することが進化的に安定な状態になるかを理論的に検討することができる。このような進化ゲーム理論等のモデルを取り入れつつ、近年は①赦しと謝罪を通じた和解研究、②評判と信頼にもとづく協力システムの維持に関する研究、③幼少期の経験による生活史戦略の調整に関する研究等を行っている。

主たる担当科目は、「社会心理学概論Ⅱ」（概ね隔年開講）、「社会心理学実習Ⅲ」、「社会心理学演習」である。社会心理学概論では基礎学問としての社会心理学の意義について論じる。社会心理学実習では、オンライン実験の実施に必要なプログラミング、データ分析、論文・報告書の作成スキルを学ぶ。演習では社会心理学だけでなく動物行動学、進化ゲーム理論、エージェント・ベース・モデル等の分野をカバーする学際的な文献を扱う。

### 石井 敬子 教授

人は、日常生活を通じてさまざまな文化的慣習に参加している。同時に文化的慣習への参加は、その慣習のみならず、文化の中で優勢な価値を維持し、時には変えていくことになる。このように文化と人は切っても切れない関係であることを踏まえ、私の研究では、①人の心の性質、特に認知や感情の認識はどの程度文化的慣習の影響を受けるか、②文化的な慣習や価値はどのように伝達され、変容されるかを

明らかにしていくことを目指している。また、いくつかの国際比較のプロジェクトに協力し、幅広い視点から心の性質の社会・文化依存性を探求している。認知や感情の認識の文化差を理解することは、異文化間コミュニケーションや異文化の受容といった今後重要性を増す多くの実用的分野にも貢献できると思われる。

主な担当科目は、「社会心理学概論Ⅰ」（概ね隔年担当）、「社会心理学実習Ⅲ」、「社会心理学演習」である。概論では、社会心理学の中核的問題ともいえる社会・文化環境と心との相互構成過程に関し、その環境の影響が脳や遺伝子にまで至る可能性を探る文化神経科学のアプローチに基づき概観する。実習では、認知や感情認識に関する実験を通じ、実験デザインの設定、データ分析、その結果に基づく論文作成といったプロセスとそのスキルを学ぶ。演習では、社会的認知研究に関する論文講読を通じて、特にその知見に基づく社会政策への貢献、限界点、今後の展望について議論する。

### 稲増 一憲 准教授

人々の世論形成過程やそれに対するメディア・コミュニケーションの影響を中心に、現代の社会問題に対して社会心理学の観点からアプローチする応用的な研究を行っている。人間の普遍的な傾向を扱うことの多い心理学と、国や社会制度等の文脈を踏まえた議論を行うことの多い政治学や社会学との架橋を目指し、政治学者や社会学者たちとの共同研究を行っている。近年取り組んでいる具体的な研究テーマとしては、①多様化するメディア環境における人々の価値観の変容についての研究、②世論を分断する対立軸の解明、③ナショナリズムの功罪についての実証的研究などである。

主な担当科目は、「社会心理学概論Ⅰ」（概ね隔年担当）、「社会心理学実習Ⅱ」および「社会心理学演習」である。概論では、他者との相互作用が人々にどのような影響をもたらすのか、集団やマクロな社会関係に置かれた人々がどのように行動するかを社会心理学の知見に基づいて概説する。また、逆に人々の行動が集団やマクロな社会をどのように変化させるかについても扱う。実習では、仮説生成から研究計画の立案、データ収集と解析、論文等でのアウトプットといった一連の過程を身に着ける。演習では、現代社会における問題を扱った文献を取り上げ、考察・議論を行う。取り上げる文献は必ずしも社会心理学分野の論文に限定されないが、これらの文献に対する批判的検討から、社会心理学的考察へと繋げる。

最後に、卒業生の進路は、大学院の他、民間企業、情報産業、官庁など多岐にわたっている。社会心理学を学ぶことで身につけたデータ分析の考え方や問題解決への道筋は、将来どのような進路に進む人にとっても、役に立つものとなり得るだろう。